**第10回日本発の社会貢献ファンドレイジング研究会実施報告**

***「フィリピンの零細農民向けマイクロファイナンス事業の経験から」***

平成27年1月26日

**プレゼンター**：松浦わか子（プラネットファイナンスジャパン・プロジェクトマネージャー）

**日時**：2014年11月22日（土）　時間：10:30～13:00

**場所**： アジア文化会館

**出席者数：**講師を含め13名

**今次研究会合の趣旨**： プラネットファイナンスジャパンがフィリピン・ミンダナオ島で3年間にわたって実施してきたJICA草の根事業「フィリピン・ミンダナオにおける零細農民の金融アクセス改善プロジェクト」の終了を受けて、現地に3年間駐在してプロジェクトの実施に関わってきた松浦わか子プロジェクトマネージャーから、農民向けマイクロファイナンスのメカニズム、同事業から得られて教訓、今後の事業の持続性確保のために講じられた金融リテラシー向上等のためにとられた措置ならびに同事業の貧困削減の効果等についての話を伺い、出席者との間で意見交換を行う。

1. **冒頭導入説明**（リソース・パーソン田中和夫元プラネットファイナンス専務理事兼事務局長）
2. プラネットファイナンスジャパンがフィリピン・ミンダナオ島で実施したJICA草の根技術協力事業は、2009年以降何度も挑戦し続けた上で2011年5月に採択された。
3. 事業のパートナーとなったミンダナオ・マイクロファイナンス・カウンシル（MMC）とともに、傘下にある3つのマイクロファイナンス機関を協力団体として選定し、後述する技術支援を行った。この事業を通じてプラネットファイナンスジャパンはパートナーとなったMMCにも技術支援を実施することにより、事業終了後も傘下の他のマイクロファイナンス機関に対しても持続的に技術支援が行えるよう目論んだ。
4. 事業開始直後の事業協力団体選定のための説明会の当日、会場近郊で日系企業がゲリラの襲撃を受けるという事件発生した。現地に渡航できないという事態も発生した。台風や地震にも見舞われ、振り返れば想定外のさまざまな困難を克服しながら事業が完遂された。
5. **松浦わか子氏プレゼンの注目点**
6. 本件事業は、ネットワーク型NGOであるMMCをパートナーとし、MMCのキャパビルを通じてそのメンバー団体のキャパビルを目標として実施された。MMCの傘下にある30の所属団体のうち、特徴の異なる3つの団体が協力団体として選定された。具体的には、NGO型MFIであるAakay Ang Milamdec Microfinance Foundation Inc. 協同組合型MFIであるBansalan Cooperative Society、協同組合銀行型MFIであるCooperative Bank of Cotabatoの3つが選定された。事業目標は、「零細農民の金融アクセスの改善」であり、技術支援の3本柱は、①農業MF商品開発、②金融リテラシー研修、③社会的経営マネージメントであった。
7. 農業MF商品開発に関しては、その商品設計において、週毎の返済を行う通常型MFと異なり、収入が収穫時に集中することに起因するキャッシュフロー・ギャップをいかに埋めるのかが課題となる。そのため実証試験を実施し、商品改良WSも2回開催した。その際、コモディティプロファイルを用いた農作物毎のキャッシュフロー分析を実施した。その中では、作物栽培のプロセス、各段階で生じる原材料費と人件費を一覧表にまとめていつどこで、いかなる費用が発生するかを把握できるよう努めた。
8. 金融リテラシーに関しては、お金を借りるということ自体は最低限の行動であり、借りたお金をどのように有効に活用するかというマインドがなければ、生活改善は難しい。良いローンは必要であるが、それにプラスして、どう使うのかに関する非金融サービスの訓練が必要となる。事業対象地では、週に１度センターミーティング（集会）が開催され、ローンの返済や貯蓄の集金が行われる。農民は実は忙しく、集会はかなりの負担になっている。そこで、別立てで研修プログラムを実施するのではなく、本事業では同集会を利用し、１回の融資サイクルに合わせて、例えば毎回15-30分の3ヶ月×12回セットといったようなモジュールを用意し実施した。
9. 金融リテラシー研修のひとつの手法として、Experienced Based Learning（EBL）サイクルを取り入れたアダルトトレーニング手法も実践した。この研修では、受講者が能動的に判断できるようになることを意図してゲームも取り入れた。コイン・フリップの例を紹介する。参加者に、まず、ひとつのコインをひとつのローンにみたてて、上方に弾いて、それを床に落とすことなく手のひらで拾い受ける。ほとんどの人が成功する。それが二つのコインになると拾える場合と拾えない場合が出てくる。３つ以上になると、ほとんどの人が失敗する。また、コインを高く上げすぎても失敗の回数が増える。このようなゲームを通じて、多重債務へのイメージを実感してもらっている。
10. 次に社会的経営マネージメント（SPM：Social Performance Management）について、本事業の取り組みを紹介する。MFIは金融機関として持続可能になるため収益の確保という財務目標の達成が求められる一方で、貧しい人々へのアウトリーチを拡大し、貧困削減に貢献するという社会的目標の達成も同時に求められるという、いわゆるダブル・ボトムラインを追求する必要に迫られている。そこで、貧困からの脱却をどのようにモニターするのかが重要になる。グラミン銀行が開発した貧困からの脱却を推測するツールとして、PPI（Progress out of Poverty Index）がある。PPIはSPMというマネージメント手法の１つのツールではあるが、PPI導入をもってSPMが実現されたとの認識を改める必要がある。
11. SPMに関しては、ミッションを再構築しソーシャルパフォーマンスをMFIのオペレーションに組み込むためのSPM Strategic Realignment WSを、月から金までの５日間の集中WSとして実施した。その中で、SWOTを用いた現状分析と新たなミッションのギャップを認識し、それに向けての戦略マップ、オペレーション計画、対話計画、次の行動計画の策定を行った。ミッションの再構築では、顧客が自分のMFIの融資を受ける「以前」と「以降」、どのように環境を改善していくのかを絵で描写してもらい（たとえば、竹材のシンプルな住居がコンクリート製の菜園や家畜のいる住居に変貌等）、それを実現するための戦略や行動を考えてもらった。
12. 事業は本年8月で終了したが、技術支援活動の３本柱のそれぞれで、満足できる結果が得られた。まず、農業MF商品開発については、2014年7月23日現在、612名の零細農民（Milamdec・BCSの合計）に新商品を届けることができた。同MFに付随して貯蓄も約310万ペソ（約710万円）増加した。1日の延滞債権率は、Milamdecで4.02％、BCSで0.98％であった。次に金融リテラシー研修では、対象3MFIの職員188名に研修を実施し、さらに、3MFI合計で1,877名の零細農民が研修に参加した。研修受講者1,720名のうち、99.4％の農民が、金融リテラシーが向上したと回答した。社会的経営パフォーマンスについては、ミッションに基づいた社会的経営戦略が、MFIの戦略計画とマニュアルに含まれることになり、また、PPIがMFIの情報システムに組み込まれることになった。
13. 社会的経営マネージメントの各手法については、Social Performance Task Force, Imp-Act Consortium, MICROFINANCE CENTREの各サイトで公開されており、アクセス可能になっている。

**３．質疑応答**

（１）融資残高の規模如何。

●　農業MF商品の融資規模は、現地通貨で1件あたり5千ペソから10万ペソ、日本円に直して、1万円~20/30万円程度で、これに612名をかけた数字が大凡の融資規模となる。

（２）不良債権の管理と貸し倒れ率の計算はどのように実施するのか。農業MF商品の1日以内の延滞債権率は、Milamdecで4.02％、BCSで0.98％とあるが、農業MF商品の場合、一括返済であれば、1日だけの返済カテゴリーで問題ないのかもしれないものの、通常は、ある1回の返済が無事終わっても、次の回に延滞を起こす可能性も排除されない。1日以内ということではなく、30日以内、60日以内という枠内で不良債権の割合を公表すべきでないか。

●　この数字は、一日返済が遅れたローンの割合である。通常はエイジングレポートにおいて30日、60日と追跡していくが、今回開発した農業MFは一括返済の商品のみであったため、30日以上、60日以上の延滞債権率は改善こそすれ悪化することはない。ちなみに農業MF商品の１回目のパイロットテストでは一括返済を4割、残り6割を週毎の返済方式としていたが、最終的には顧客の需要に合わせてすべて一括返済方式となった。

（３）農産物は、自然災害等の影響を受けやすいが、農業MF商品における保険の取り扱いはどうなっているのか。

●　フィリピンでは、保険を扱うためには保険会社としての免許取得が必要であるが、MFIが免許を取得しているケースはまだほとんどない。そのためMFIはAgricultural Guarantee Fund Program, Philippines Crop Insurance Corporation等の保険専門機関の保険サービスをその融資商品の中に組み込んでいる場合が多い。

（４）農業MFのモニタリング

●　農業MFローンの支払いは、3～4回に渡って実施されるが、融資されたお金が適切に使用されているかどうかをチェック（Loan Utilization Check）が実施されており、支払後、MFIのローン・オフィサーが各家庭を訪問し、領収書を確認するとか、ローン提供に際して特定した栽培用の種を買ったかどうか等実物検査も含めて、面談調査を行っている。

（５）新規に開発された農業MFのローンが612名に届けられたということであったが、この数は、新規の追加顧客の数と理解して良いのか。

●　事業対象とした３つのMFIのうち、ひとつは借り入れ条件に当該MFIの既存融資商品の優良顧客であること、が謳われているため、数字としてはミックスである。なお、農業MF商品自体は、これまで存在していなかったため、農業MFローンとしては、新規である。

（６）農業MFの利子率如何。

●　融資期間6ヶ月として、利率が20～30％である。

（７）高金利にもかかわらず延滞率が低いということは、逆説的だが農民の貯蓄性向は高いことを意味している。金融リテラシー向上に当たっては、貯蓄を習慣づけることに焦点を置くべきでは。

●　確かに貯蓄は最もリスクの低い資金準備といえ、融資に頼らずにすむのであればそれに超したことはない。しかし現状多くの貧しい農民が農業活動の投入物に融資を必要としているのが現実。貯蓄の奨励は行われており、フィリピンでは、規制上顧客から預金を回収できないNGO型MFIにおいても、強制預金にあたるcapital built up方式で積み立てが行われている。

（８）3つのMFIによる零細農民を対象にした農業MF商品提供に際しての対象となる農民の条件・クライテリア如何。

●　今回の商品では3ha以下の土地をもつ農民を対象としている。但し、融資金額の設定は、日本円で約1万円～20万円ぐらいまで幅があるが、土地の面積ではなく、世帯全体としてのキャッシュフローを確認（世帯収入－世帯支出）し、世帯としていくら余力があるのかを調べたうえで、貸付金額を決定している。フィリピンでは、世帯の中で、農業以外にもタクシー・ドライバーその他で収入を得たりと複数の稼ぎ手がいる場合が多く、世帯の収支全体で判断している。

（９）他のMFIとの競合関係如何。

●　ミンダナオ島においては、CARDをはじめ多くのMFIが活動しており、競争は激化している。農業MF商品 も2011年から2014年のプロジェクト期間中だけでもあちこちで開始された。今後ますます顧客保護等の観点からSPMが重要になるだろう。

（10）SPMツールを活用したMFの貧困削減効果の判断

●　大学が中心になってランダム化比較試験（RCT）手法を用いて、MFによる貧困削減効果を確認しようという調査研究も行われているものの、現在のところ、YesともNoとも確たる結論が得られていないと承知している。PPIは、一日に食事を何回とっているとか子供が学校に通っているとか、住居の材料が何であるかといった単純な調査項目の回答をそれぞれの指標に基づき得点化し、その集計結果で所得水準との関連により、ある世帯が貧困ラインの上か下かを測定するツールである。PPIは、スタッフが調査した結果を持ち帰って集計するため、コストがかかり、うまく機能していない場合もあるが、貧困削減効果を推定する上は重要なツールである。効率的な利用方法の検討が求められる。

（11）フィリピンにおけるMFIのSPMへの対応

●　特にNGO型MFIはSPMを重視している傾向があり、時には社会的目標達成に偏りすぎて、財務的目標達成が疎かになり、倒産しかけている団体もある。逆に財務的目標に偏りすぎてSPMがなおざりになっているMFIもある。MFI間の競争が激化するなかで、今後いっそうバランスの取れた経営が求められる。

●　フィリピンにおいては、銀行や協同組合等の組織毎に監督官庁が存在するが、NGO型MFIは、証券取引所に登録されることになる。NGO登録は必要であるが、預金を集めることはできない（但し、上述のとおりcapital built upとして、実質的に積み立ては行われている）。

（13）ミンダナオ島にはイスラム教徒の住民も多いと認識しているが、本事業にはイスラム教徒住民も対象にしたのか。

●　本事業の対象者にはキリスト教徒だけではなくイスラム教徒も含まれていた。イスラム教徒については、イスラム金融を通じた利子を介しないMFスキームも存在するが、今回の事業の対象となったイスラム教徒は利子を介する取引にはこだわらないリベラルな人々であった。イスラム金融型MF商品は今後の検討課題ではある。

（14）本件事業は、金融リテラシー研修等を通じて、MMCのキャパビルを行ったわけであるが、今後の持続可能性をモニターしている課程で、課題を見つかれば、新たな資金を投入して事業を実施するという可能性はあるのか。

●　現地からはその後の活動状況を定期報告してもらうことになっており、しっかりモニターしていきたいと考えている。その課程で課題が認識され、資金提供者が見つかれば、ぜひ追加的事業を実施したい。

（粟野晴子氏コメント）

このプロジェクトは、SPMと農業融資というMFでも大きな課題に取り組んだものなので、この経験が他でも活用されることを期待したい。今後の展開としては、SPMの導入によってMFのアウトリーチ拡大・サービス改善・返済率の改善などによる財務への相乗効果の計測、農業融資でバリューチェーンのアクターを活用したバリューチェーンファイナンスの導入なども考えられるのではないか。

■**講師**　松浦わか子**略歴**

民間エネルギー会社にて勤務後、2011年に特定非営利活動法人プラネットファイナンスジャパン入社。2013年よりプロジェクトマネージャーとして、フィリピンでの零細農民向けマイクロファイナンス事業や、ミャンマーのマイクロファイナンス機関向け研修、JICA能力強化研修等、様々な事業に携わる。

■**講師所属団体について**

**プラネットファイナンス**：途上国のマイクロファイナンス支援を実施する国際NGO。現在世界60か国で活動し、マイクロファイナンス機関の能力強化を支援している。

**プラネットファイナンスジャパン**：2006年に設立された日本のNPO法人。日本発の途上国マイクロファイナンス支援を活性化するため、日本の政府や企業、一般に向けた普及啓発活動、途上国におけるプロジェクト等を実施している。

以上